

洗星海の生涯(上)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2012-05-16 キーワード: 作成者: 岩崎, 富久男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/12131

洗星海の生涯(上)

岩崎 富久男

はじめに

いま中国で歌われている歌といえば、すべて革命歌曲であるが、これら革命歌曲の先駆をなしたのは、日本の圧迫と侵略に抗して起った、1935年の救亡歌曲の運動であった。

救亡歌曲運動は、歌曲によって、外敵による祖国存亡の危機を訴え、民衆の決起を促したばかりでなく、軍閥支配下にあつて抑圧された民衆の苦しみや国民党支配への怒りを歌うものもあつて、いわば音楽の分野における反帝・反封建の具体的な闘争実践であつた。この運動の先頭に立って多くの歌曲を創造し、現在中国革命音楽の先駆者として高い評価を得ているのが、聶耳(1912—1935)と洗星海(1905—1945)である。中国国歌の作曲者聶耳については、さき(1)にその生涯を『聶耳小伝——中国国歌作曲者の生涯』にまとめたので、本稿では、『黄河』で知られる洗星海の生涯について考察してみることにした。

聶耳の場合と同様、この洗星海についても、わが国では極めて簡略な紹介(2)がなされているのみで、その偉業をたたえるに足る研究紹介がない。中国には、洗星海の伝記や歌曲創作に関する調査研究が、少なからずあるにはあるが、残念ながら現在日本で入手できる資料は断片的なものであつたり、簡略にすぎたり、必ずしも精緻なものとは言いがたい。(2)むしろ中国において本格的な調査研



洗星海先生遺像
(1905—1945)

究が行なわれることを期待してやまないが、現在拙稿において若干の考察を加え、それもかなり大胆な推測をおりませつつ洗星海の生涯を綴ることも、現在の段階では決して無意味ではないと思う。なお本稿は紙幅の関係で上下の二部に分け、ここでは生いたちよりパリ留学を終えて帰国するまでの前半生を綴り、後半生は次稿にゆずること

にした。拙稿が今後この方面の研究にながしか参考になれば幸甚である。

I 生いたち (マカオー広東?—シンガポール 1905年—1919?年)

洗星海は、1905年広東省番禺の漁師の家に生まれた。たとえば郭乃安や村松一弥は上記のように記している。また他には「洗星海先生生於広東番禺，父親名洗喜泰，以漁航為業。母名蘇英，係農村婦女。」⁽³⁾とか「出身於船工的家庭」⁽⁴⁾⁽⁵⁾の如く紹介するものもある。

孫幼蘭は、調査訪問、史料翻閲の結果、その生いたちを次のように記している。「洗星海の祖父は名を容添といい、祖母は盧氏、『操工』をもって業としていた。父、洗喜泰は広東番禺の人、漁業に従事し、海員になったことがある。母、黃蘇英は広東の人。32才にして寡婦となる。1905年6月13日、星海澳門に

生まれる。星海出生の半年前に父すでに世を去る。星海出生後、外祖父の家に身を寄せる。外祖父黄錦村は海員であった。⁽⁶⁾」

孫幼蘭は、星海の父の死を、星海の出生する半年前だとしているが、若柵によれば「星海出生後ほどなくして」ということになる。⁽⁷⁾

このように孫幼蘭によれば、星海の家は、父が「漁業に従事し、海員になったことがある」とあるので、「漁師」と解することもできるが、「海員」すなわち漁師とは限らない。また「漁業に従事し、海員になったことがある」ということは、漁業に従事したこともあるが、また漁業に関係のない「海員」になったこともある、とも読みとれる。ひきとられて育てられた外祖父は、ただ「海員」とあるだけなので、その場合漁を業としない海員ということになる。

孫幼蘭は、星海没後17年を経た1963年の段階で、「17年来、洗星海の生平や創作に対して、人びとは少なからずの調査研究を進めてきたが、洗星海の早年や嶺南大学在学中の情況について理解や紹介が十分とは言えない」⁽⁸⁾ことから、直接現地を訪問して調査し、あるいは関係資料を翻閲した結果を報告しているのであるが、それでもなおこのように生家の情況を十分明らかにし得てはいない。

孫幼蘭が明らかにしているように、洗星海の生まれた所は澳門（マカオ）である。「番禺」に生まれたとする説は、父が番禺の人であったことに基づく。だが孫幼蘭の記述によっても、星海の育った所、つまり生後ひきとられた母の実家の所在地をはっきり挙げるができない。母は「広東の人」とあり、かつ「農村の婦女」とあるから、実家の所在地は広東省内のいづこかの農村になろう。母が農村の婦人、つまり農家の出身で、外祖父が海員というのは一見矛盾しているようだが、祖父だけが農事を離れ、海員となったとも考えられる。

洗星海は、この母の実家で6才までの幼時を過ごす。4才になる前は病気がちであったという。6才にして『三字経』等の古書を読み始めた⁽⁹⁾とあるところからみると、外祖父の家は比較的裕福で、孫の星海をだいに育て、このような勉学を許す経済的な余裕があったことを示す。このことから推して、祖父は下級の「海員」ではないと思われる。あるいは農事を家人に托し、別に海航に

たずさわって得る収入があったからかも知れない。

しかし、この年（1911年）外祖父が歿するに及んで、母子は居をシンガポールに移すことになる。祖父の死によって、海員の収入を絶たれたあと、この母子を扶養するだけの余裕は、もはや実家にはなかったのかも知れない。しかしその間の事情を明らかにする資料は今のところ見ることはできない。星海母子がなぜ遠くシンガポールにまで渡らなければならなかったのか、やはりその間の事情も何一つとしてさだかではない。おそらくは頼るべき親類縁者がいたからであろうが、シンガポールに渡ってから、星海の母は、傭工や小学校の洗濯女をやって母子ふたりの生活を支え、かつしきりに星海に「読書」させた。

若柁によると、母は嶺南の工役つまり「小使い」をしていた。星海はこの時、少なからずの経書を読んだ、と孫幼蘭は伝えている。6才のがんぜない子どもが、ひとり「経書」をひもとくことは、とても不可能であるから、よしんばそれが寺小屋式の町の塾であったにせよ、しかるべく師について学ばなければならない。毛子良は、1911年「是年入学旧式学校、開始読四書五経、凡四年⁽¹⁰⁾」と記している。その旧式学校の名称等については、今のところ知るよしもない。

思うに、星海にかけたこのような教育の費用は、傭工の母にしてみれば、なまやさしい負担ではなかったはずである。にもかかわらず星海に勉学をつづけさせたのは、それだけ星海の資質がすぐれていたからにちがいない。だから母はその後もさらに星海に学業を修めさせるべく正規の学校に送りこんだのであろう。

1915年、10才の時、さらにイギリス人の経営する英文学校に入学した。やはり学校名は、今のところ知るよしもない。翌1916年、11才の時、改めて華僑の経営する学校に入学する。これは嶺南分校高小部である。そして1918年ないし1919年のころ、広州の嶺南大学附属の学校に進学するため、シンガポールを離れるのである。

Ⅱ 広州時代（1919年？—1925年秋）

孫幼蘭は、1920年の前後に星海が広州にもどったとする。毛子良は、1918年13才、広東にもどり嶺南大学附属中学に進学したとしている。毛子良はシンガポールの嶺南分校高小部の修学期間を2年とおさえて、1918年としているのかも知れない。しかし後述するように広州の中学時代の事跡から逆算すると、毛子良の説はいささか苦しいように思える。さて孫幼蘭によると、「嶺南招收回国の第1回華僑学生のひとり」として広州にもどったのであり、初めは嶺南の「華僑特別班」にて学習し、「主として国文、国語、字課、作文、史地を学ぶ。のち中学に進級し、1928班に学んだ⁽¹¹⁾」という。ともかく「華僑特別班」の在学期間がどれだけあったのか不明だが、中学への進級は1920年ということになる。

嶺南1928班は、別に「惺社」という班名で呼ばれており、「華楽隊」の組織をもっていた。星海はこの中学時代、すでに音楽に対し非常に熱心で、校内の音楽活動に積極的に参加し、早くも嶺南大学軍楽隊の隊員になっていた。星海がいつごろから音楽に興味をもったのかはさだかではない。だが後述するように母は民歌がじょうずで、よく歌っていたというから、幼少のころ母から受けた影響も少なくなかったようである。ともかく中学生になった時には、このように音楽とのかかわりが非常に深くなっていたのである。彼が17才、中学3年の時、1922年9月9日の晩、小学童子部の最初の「交際大会」が開催されたが、ここで彼はクラリネットの独奏を行ない、喝采を拍したという。

また星海は音楽ばかりでなく、美術や書道をも愛好した。「惺社」の社友は、中学3年の課程を終えると、社刊『惺社』を出版したが、星海はこれの美術主任を担当していた。彼はまたこの『惺社』に「中国書学略譚」と題して、7千字に及ぶ長文の、それも文言体の論説を發表し、書について蘊蓄を傾けたりしたという。

星海は幼時より貧しい母子家庭に育っていたし、実際に母からの仕送りに頼るわけにはいかなかった。彼は生活を極度にきりつめ、また香港に出て映画の楽隊やタイピストのアルバイトをして、なにがしかの学費を得ねばならなかった。当時「嶺南」には「草棚宿舍」が設けられていて、宿舍費も安かった。彼

はこの簡陋な草ぶき小屋の住人であった。

だから星海は深い愛情をこめて「村童」に対したのだった。1922年秋から翌23年夏にかけて、彼は中学3年に在学していたが、この期間「嶺南」青年会村郷服務村童委員会の正主任を担当した。1922年9月、彼は同学とともに、貧困のため学校に入れない村の子どもたちを探訪した記事を校刊『南大青年』に書き、村童探訪隊の活動を報告している。彼らは村の子どもたちに玩具を送り、球技で遊び、文字を教えた。だから子どもたちは彼らにたいへんなつき、「日夜いつも来てくれる」よう待ち望んだということである。

星海は1923年夏、中学3年を終了すると2年間休学せざるを得なかった。資力が続かなかつたのである。彼は香港に出て楽隊やタイプのアルバイトに精を出し、生活を維持するとともに、学業を継続すべく資金を蓄えた。しかし休学中も「嶺南」との関係は切れなかった。彼は惺社の社友として惺社の活動や校内の各種活動に参加した。むしろ星海を欠いては、このような活動が成り立たないぐらいこの方面における星海の存在が大きくなっていただろう。例えば1924年2月の惺社全体会議では、星海を音楽責任者とすることを決議し、5月の全校交際大会のための準備に当たらせている。

復学したのは、1925年であった。彼は大学予科に学ぶかたわら華僑学生会の庶務を担当した。6月南大華僑学生会第5回交際大会に出演している。

1925年といえば、世界をゆるがした五・三〇事件が起った年である。上海・青島等の日本資本の紡績工場でストライキ中の労働者が軍閥の軍警に射殺されるという事件があいつぎ、虐殺に抗議した学生と民衆に対し英人警部の指揮する租界警察が発砲し、多数の死傷者を出した事件である。この時、広州でも、6月23日、10万余の民衆が抗議のデモンストレーションを行なったが、広州イギリス租界沙面の英軍から銃火をあびせられ、52名が殺され、170余名が傷ついた。そのため、広東国民政府はイギリスとの経済断交を宣し、また香港の労働者もつぎに広州にひきあげた。埠頭の労働者から家庭のボーイに及ぶまで香港を去ったので、香港は一時無人の廢港と化したのだが、星海の復学が、この広州・香港の反帝闘争といかなる関連があるのか、孫幼蘭の調査でも、なぜか一

つも明らかにされていないのは不思議と言ってよい。

すでに広州には国共合作によって国民政府が樹立しており、約二個師団の国民革命軍も編成され、広東広西両省の軍閥部隊と闘って勝利し、両省を革命根拠地として固めていた。

学業を中断せざるを得なかった20才の貧苦の青年星海にとって、中国革命の新しい頁を開いた五・三〇事件と広州の反帝闘争は、少なからず影響を与えたと見たい。だが彼の具体的行動がどうであったかを伝える史料は何もない。それは星海がこの時期にはまだ思想的にめざめておらず、当面の関心事が国家・世界の大事より個人の学業継続——復学にあり、好きな音楽に心を奪われた一介の音楽青年でしかなかったということかもしれない。少くとも政治の動きとのかかわりあいには、さほど深くなかったと見てよいと思う。

星海は待望の嶺南大学に復学したが、しかしそれもつかの間、彼はさらに音楽をもって身を立てる決意を固めるに至るようである。学業なかばにして彼は再び嶺南大学を離れ、北京にのぼり、音楽を専門に学ぶことにしたのである。

Ⅲ 北京時代（1925年秋—1926年夏）

冼星海は1925年秋、北京に行き、北京芸術専門学校音楽系バイオリン選料に入り、トノー⁽¹²⁾（托諾）の指導を受ける。1926年6月12日、国立北京芸術専門学校音楽科第一次学生演奏会が、ベートーベン百周年を記念して開かれた時、彼は演出を担当し、また「記念曲」のバイオリン独奏を演じた。

同時に星海は北京大学音楽伝習所で、音楽理論とバイオリンを専習してもいる。そして「図書館管理員」⁽¹³⁾の職を得て口に糊する一方、学生運動にも参加したという。しかし「五四」以来学生運動のメッカとなった北京大学で、彼が学生運動とどのように触れあいをもったのか、孫幼蘭は具体的なことは一つも伝えていない。一年たらずの北京遊学は、きびしい半工半読の音楽修行であったから、なにがしか学生運動に参加したことがあったにしても、深く関係することは不可能であったにちがいない。

働きながら学ぶ北京の生活を一年たらずで切りあげることになったのは、考

えられる理由として、一つは経済的にこれ以上勉学を続ける余裕がなくなったこと、一つはいくらかなりとも音楽を生かせるような適当な就職口を広州に得たこと、もう一つは、いま中国で「第一次国内革命戦争」とよばれる「北伐」の発動等を挙げることができよう。ただし今のところこの「北伐」が動機となって広州にもどったとする事例を挙げることはできないばかりでなく、星海がとりくんだ音楽会などから見て、「北伐」と関連づけて考えることはいささか無理のようである。

Ⅳ 再び広州時代（1926年夏—1928年夏）

1926年の夏広州にもどると、星海はまた一年休学の手続きをとった。

休学期間中、彼は青年会本部事業部音楽主任、青年会A N Y弦楽隊主任をやり、また培正中学で音楽を教えた。

翌1927年秋、大学予科に復学してからも、校内の音楽活動の責任者として活躍した。嶺南大学軍楽隊の隊長、附設華僑学校音楽助教員となり、1928年の春はひきつづき青年会本部事業部音楽主任となった。そしてこの間彼は次の音楽会を組織している。

1926年12月 附設華僑学校クリスマスイブ音楽会

1927年11月 第二回華僑夕陽会音楽会

1928年4月 青年会主催復活祭音楽会

1928年5月 国際音楽大会

国際音楽大会は、5月12日の夜、嶺南大学の懐士堂で開かれた。プログラムによれば東洋音楽、民歌、東洋化した西洋音楽、特別音楽の四部門に分け、当時広州にあった中外の音楽家によって演奏されたようである。その盛況ぶりについて孫幼蘭は当時の史料を引いて、「市内の来賓にしてうわさを聞いて集った者は、ついに数百人に達し、懐士堂は満員となり、おくれて来た人には立錫⁽¹⁴⁾の余地もなかった」と伝えている。

ここで注目に値するのは、この音楽会の組織者として星海らが当時すでに東洋音楽と民歌を非常に重視したという点である。このことは冼星海音楽の体質

と関連するので、後述したい。

また星海は音楽会の積極的な組織者として活躍したばかりでなく、もちろん熱心な演奏者でもあった。当時の彼の演奏活動を列挙すると、1927年1月8日の新年音楽同楽会、10月30日の嶺南大学青年会・女子青年会、11月6日の広州各校青年会音楽大会、1928年2月19日の華僑学校迎新会、4月15日の広東学生基督教青年会協会の音楽礼拝等がある。

星海は校内基督教青年会の音楽方面の責任者で、青年会の行なう各種音楽会活動に参加していたが、彼自身は特に宗教とは関係なく、信仰に傾倒するようなことはなかったという。

星海はまた美術に対しても大変熱心で、校内の美術活動に積極的に参加していた。たとえば1928年春には、5月に挙行される美術展覧会の準備に協力していた。同年3月30日出版の『南大思潮』創刊号では表紙のレイアウトをやっているばかりか、詞作「如夢令」を発表し、なみなみならぬ詩才をも示したのであった。

そのほか『嶺中』1928年春季に「紀念曲的断片」という抒情詩的なエッセイを発表し、朝な夕なに奏せられる宇宙の楽隊の美しい音色のことなど綴ったという。フランスに行ったあとも、1931年12月20日出版の『南大青年』20巻5期には、Mary Coleridge の短篇「皇帝死了，皇帝万才！」を翻訳している。

星海は多忙な半工半読の生活に加えて、このようにめまぐるしく音楽や文芸の活動をしていたが、さらにここで注目すべきことは、孫幼蘭のつぎの記述である。

「折から大革命の時期にあつて、^二民学校や工人夜校で労働人民に文字を教えた。だが彼の教えた労働者の多くが大革命の中で犠牲となった。このことは、当時の星海が思想感情のうえで労働人民と密切に結びついていたことをものがたっている。⁽¹⁵⁾」

広州にもどってから星海は、北伐、蔣介石の反共クーデター、中共の武力蜂起等激動する時代の渦中に身を置いているのだが、自己をこれと厳しく対置させ鋭くとらえていないように思える。どちらかといえば貧民救済といった基督

教青年会的発想で、賤められた置民や貧しい労働者の中に入る甘さが、まだ根強くあったのではないか。だから広州における労働者の蜂起が失敗し、彼が教えた労働者の多くが死んでいったというのに、上述のように革命に関係のない音楽活動に忙殺されているのは一体どういうことなのだろうか。この時期に星海は、一切を投げ棄てて、すべてを音楽にかける決意をした時だったのだ。

若柵によると、星海は広州で、「中国の有名なバイオリニスト馬思聰先生と並び称せられ、南国の名演奏家ともてはやされていたが、青年星海にとって軍楽隊長、音楽教員、南国の名演奏家の榮譽では、その天与の才能をさらにのびたいという抱負や願望を満たすことはできなかった。そこで彼はありったけの蓄えをもって、きっぱりと職を辞し、上海に赴き、さらにその蘊奥をきわめようとしたのである⁽¹⁶⁾」ということになる。ここでは若柵の説を採りたい。

V 上海時代 (1928年夏—1929年)

1928年の夏、冼星海は嶺南を去って上海にやってきた。毛子良の年譜によると、星海は「1927年の下半期、上海に行き国立音楽院に入った」とある。しかしこれは1928年4月15日に広東学生基督教青年会の音楽礼拝を星海が指揮しているのであるから、1927年説を採ることはできない。

さて上海での生活がどのようなものであったかを伝えるものは非常に少ない。

毛子良は、国立上海音楽院に入学してから、「1928年の前半(?) ストライキをやり、学校当局の反動的な措置に反対したため除籍になった。(この時張曙は捕えられた。)のち田漢の組織した南国社に参加し、任光らを織る。またいつも獄中の張曙を訪ね慰問していた。1929年パリに行く。」⁽¹⁷⁾を記している。

若柵によると、上海での「星海は芸術のための芸術を求める音楽家ではなかった。彼の音楽芸術は、反帝反封建の民族民主革命事業に服務するものであった。彼の生活は当時の大革命と結びついていた。彼は上海で有名な『南国社』に参加し、学校での革命スト闘争の中でも積極分子のひとりだった。(中略)彼は国民党独裁支配集団の残酷な迫害に遭い、血なまぐさい弾圧をのがれ、ふ

ところにわずか船旅に足りるだけの金を入れ、天賦の才能をのぼしたいという要求を満足させるために、またしても心を鬼にして慈母に別れを告げ、遠く祖国を離れ、さらに音楽の探究を求めてパリに向かった⁽¹⁸⁾」ということになる。

毛子良と若柵の記述から共通して言えることは、上海音楽院でストライキをやったこと、南国社に参加して左翼的な若い音楽家たちと知りあったことの二点である。一年足らずの半工半読の上海生活であったが、生活の方は何によって支えていたか、ここからは具体的には何も浮んでこない。

音楽の研修は、上海音楽院に在籍した期間もわずか数か月であったろうし、ここで学び得たものは何もなかったといってよいのかも知れない。ストライキをやった理由も、学校の反動的な措置に抗議することばかりではなく、音楽を学ぶ面での不満もあったことと思われる。だから星海は、国内で学ぶ限界をはっきりと感じとり、フランスでの修行を夢見るのである。

当時、中国の若い音楽家にとってフランスはあこがれの的であり、彼らはしきりにフランス留学を夢見た。馬思聰は言うに及ばず、任光もフランスに学んだ。聶耳もフランスへ留学をひそかにくわだてていた。

星海は、矢もたてもたまらずフランスへの遊学を思いつつ。洗星海は、このころのことを次のように述懐している。「私は国内で音楽を何年も学んできました。広州の嶺南大学で音楽を教えていたころ、国内で音楽を学ぶ環境がよくないと感じ、なんとかフランスに行きたいと考えるようになりました。また私は音楽のテクニックをしっかりと学び、この道で成功して『国際的』な音楽家になりたいと身のほどもわきまえず願うようになりました。ちょうどこんなことを考えあぐんでいるとき、うまい具合に馬思聰兄の援助を得て、パリにいる彼の先生ポール・オベルドフェル (Paul Oberdoeffer) を紹介してもらったのです。そこで私はたいへんな決心をし、自分の貧困をかえりみず、1929年祖国を離れ、パリに行ったのです。⁽¹⁹⁾」

この彼の述懐から、「彼は国民党独裁支配集団の残酷な迫害に遭い、血なまぐさい弾圧をのがれる」せっぱつまったパリ行ではなかったことは確かであろう。しかしこの一年たらずの上海生活で、彼が得た最も大きな収穫は、のちの

救亡歌曲運動のリーダー張曙を知ったことである。このことは、帰国後彼が救亡歌曲運動にとびこむ大きなきっかけになった。

VI パリ留学時代（1929年初夏—1935年初夏）

1929年、彼はパリにやってきた。上述のように冼星海は、馬思聰の援助を得て、フランス留学を決意し、パリにやってきたように言っている。ところが馬思聰の方は、星海との出会いを次のように綴っている。

「1928年か1929年の初夏の昼さがりだったと思う。私がマドリール街のパリ音楽院の教室から出てくると、ぼろコートをはおったひとりの広東人から声をかけられた。それが冼星海に会った最初であった。彼は私に語った。彼はやっとの思いでフランスにたどりついた。船では苦役をやった。音楽は畢生の大事で、バイオリンと作曲をどうしても学びたい。彼は私にバイオリンの先生を紹介してくれと言った。」⁽²⁰⁾

こうしてみると、冼星海か馬思聰かどちらかに記憶ちがいがあることになるが、馬思聰の方が、初対面の星海について印象が深かったせいかな、かなり詳しく記述している。このことから見て、馬思聰の言うように、ふたりは広州もしくは上海で面識があったわけではなく、パリで初めて対面したと考えてよい。こうすると星海が「馬思聰兄の援助を得て」と言っているのは、星海が直接手紙でパリでの勉学に便宜を図ってくれるよう依頼したところ、馬思聰からおりかえしパリに来れば何とかしようといった趣旨の返事をもらった、こんな程度のことを意味しているのかもしれない。

ともあれ星海は上海をあとに船中で苦役をやりながら、ひたすら馬思聰を頼って、はるばるパリにやって来たのである。初めて会ったふたりは、話しながら道を歩いた。やがて「私たちは、あるガラス戸の店の前で足をとめた。あつい湯気が戸の隙間から出ていた。そこが星海のしごと場で、浴場兼マニキュア（爪の手入れ屋）だった。星海はボーイをやっていた。」⁽²¹⁾

日を改めて星海の下宿を訪れた馬思聰は、その時の下宿のようすを次のように記している。「あかるい朝、彼は私を彼の住んでいるところに案内してくれ

た。それは大きなビルの8階か9階の屋上であった。いってみれば一間の狭い小屋で、やっとおとなが立てるぐらいの高さしかなく、床には一つの台が固定されていた。台の上はちょうど『天まど』といわれる、空に向かって開かれるガラス窓になっていた。バイオリンを練習する時、星海は台の上に立ち、上半身を屋上にのり出し、思いきり大空の天帝に向かって音階をたしかめるのであった。⁽²²⁾」

こんなひどい生活環境の中でもひたむきに音楽をきわめようとする努力に、馬思聡は尊敬の念というより驚きにも似た興奮を覚えたようである。あるいは先が思いやられるような不安を感じたかもしれない。豊かな天分に恵まれ、天才とうたわれた馬思聡から見れば、「彼は鋭い耳やしなやかな指をそなえていたわけではなかった。音楽をやるにすれば、彼の年令は残念ながらおそきに失⁽²³⁾していた」からである。

星海はこのように厳しい貧困と闘わねばならなかったばかりでなく、またおのれの資質とも、またおのれの年令とも闘わねばならなかった。事実、パリの中国人留学生の間では、むしろ星海の苦闘が嘲笑的の的にさえなっていたようで、「星海、いいかげんにしろ。上帝が特別のおぼしめしで、よしんば、1日を48時間にしてくれたにしても、勉強はおいつきはしないよ⁽²⁴⁾」と揶揄する者もいたようだ。「だが、星海は一切を顧みず、まったく『天を恐れず、地を恐れず、ただおのれが努力しないことを怕れる』だけだった。彼は夜を日に継いで、なりふりかまわず学習した。人から何と言われようとも、ひたすら勉強、勉強、勉強……であった。⁽²⁵⁾」このように死にもの狂いで頑張る星海を前にして、馬思聡はさすがにこれ以上のことは言えなかったにちがいない。

星海の方は、パリの生活を次のように綴っている。

「パリにつき、食堂のボーイのしごとを見つけてから、はじめてこの世界の名バイオリニストにバイオリンを学ぶことになりました。Oberdoeffler 先生は、以前馬兄を教えられた時、毎月月謝を 200 フラン（当時の貨幣でおおよそ10元ぐらいに相当していた）取っていました。私に教えられる時、私がアルバイトをしているとわかると、学費をとらなくなりました。つづいて私は更にガロン

(Noel Gaillon) 先生をたずね、彼について『和声学』『対位学』『賦格曲』(Fugue: 作曲に経なければならない課程)を学びました。ガロン先生はパリ音楽院の名教授でしたから、月謝は200フランとっていましたが、私が困っていると知ると、私から学費をとりませんでした。私はまた『国民学派』のスコラ・カントールム(声楽専門学校——パリで最も有名な音楽院の一つで、『パリ音楽院』と並び称せられており、またもっぱら天分を重視した。『パリ音楽院』と異るところは年齢制限を設けていなかったことである。『パリ音楽院』は20才前後に限り入学資格を有していた。このほかテクニックを重視したばかりか音楽理論を重視した)という学校の作曲教授 V. D'ludy から作曲を学びました。この人が私に最初に作曲を教えてくれた教師ということになります。以後、私はさらに Lioncourt 先生に作曲を学びました。同時に Labey 先生について指揮を学びました。このころ私はまた『パリ音楽院』に入っておらず、生活はひどく困窮し、いつも学習の障害になっていました。⁽²⁶⁾」

「私はしょっちゅう失業と飢餓に追われ、ところかまわず救いを求めていました。しごとにありついた時には、学習時間はひどく少なくなります。この時期、私はいろいろ下賤なしごとにつきました。たとえば食堂のボーイ、理髪店の雑役のようなことをやりましたし、電話番号の走り使いや、人びとからいやしめられるいろいろな下働きをやりました。しごとに追われてせわしい中を、少しのひまを見てはバイオリンを学び、譜をみ、写曲の練習をしました。しかし時間を固定するわけにはいかなかったので、授業時間はむろんどうあろうとやりくりをつけて授業を受けることにしていましたが、時には夜、台所でバイオリンの勉強をすることができれば上等ということもありました。もっともひどい時は、朝5時に起き、そのままずっと晩の12時まで仕事をつづけました。あるとき、ひるまの授業でくたくたに疲れ、もどってからまたずっと夜の9時までぶつつづけに働きましたので、とうとう料理を二階にもってあがって行った時、めまいがして料理をもったままぶったおれてしまいました。ひとしきりどやされたあと、その翌日からクビになってしまいました。⁽²⁷⁾」

加えて星海を悩ましたのは、同僚との摩擦であった。そうなったのも、彼が

苦学生であることをかくしていたからである。でなくとも中国人というだけで、満足な就職口にはなかなかありつけないのであった。ましてや苦学生とわかれれば、ますます就職の条件はせばまったからであろう。彼は、店の主人はもとより同僚にも内緒にしていたので、レッスンを受けに行くのも肩身のせまい思いをしなげばならなかった。レッスンの日になると、わざとよけいに仕事をおしつけられ、あげくは罵られたり、なぐられたり、いざこざが絶えなかった。そのため転々と職をかえねばならなかった。中国の東北から来たある同僚の場合は、星海が学習していると、いつも無理に用事を見つけて来ては、彼をしごとくに追いたてた。しかし星海は同僚のために故郷に手紙を書いて送ってやったりして親切にしてやっているうちに、同僚の方もしどいに彼を特別にかばってくれるようになり、衣服をくれたりしたこともあった。それでも彼は入学のことをこの同僚にも話さなかった。

「私は十何回も失業し、食うにもこと欠き、住む処もなくなって、いろんな問題がいっぺんに起こってしまいました。寒くて腹がすいて実際どうにもならなくなって、路上で何度もへなへたと倒れてしまったことがあります。私はその時これはどうも餓死することになりそうだと思いました。さいわいほんとうに天の助けとも言うべきか、助けてくれる人に出会ったから、なんとかなったのです。これらの人たちも、外国の流浪者でした。（ある人は没落貴族でしたし、ある人は白系ロシアでした。）たいいていは、私のことをバイオリン弾きだと知っていたようで、それでいつも何かパーティーがあれば、私に声をかけて弾奏させてくれました。そのつど1、2百フランくれました。多い時には1千フランもくれたことがあります。ある白系ロシアの夫婦は、すでに没落して苦工に身を落としていましたが、彼らも働く者の苦勞を知っていたからでしょうか、彼らが手にしたわずかばかりの賃金をさいて私を助けてくれました。——たとえば私にご馳走したりしてくれました。⁽²⁸⁾」

外国の流浪者がこのように星海の窮状に救いの手をさしのべてくれたのに反し、中国人留学生の態度は冷たかった。

「餓えのあまり今にも死にそうになって、やむなくバイオリンをさげてカフ

ェやレストランに行き、演奏しては物乞いをしました。恥を忍んで一日中弾いていても、いくらも手にすることができず、下宿にもどって思わず声をあげて泣いたものです。投げられたお金、それをまた推し戴かなければならないのです。ドアの外では屋主が部屋代をよこせと戸を叩きます。もし物乞いしたお金を彼にさし出さなければ、ブタ箱にぶちこまれる恐れがありました。（実際勉強どころの話ではなく、むしろ生きることを求めるのがやっとなのでした。）ある時物乞いをしていた時、ある金持ちの中国人留学生が私のサラを蹴とばし、よこびんたをくらわせて、貴様は中国人の恥さらしだとののしりました。私はその時反抗することもならず、涙をためて悲憤のあまりものも言えませんでした。——パリの中国人留学生は、私のことを嫌いました。彼らはみなとても金持ちで、漠大な仕送りをもらっていましたが、私には一文も貸してくれませんでした。時には、私が金を借りるために彼らを訪ねたのではないのに、彼らはドアを閉ざし(29)さえしました。」

星海の厳しい生活環境は、もう生きることが精いっぱい、とても音楽の学習どころではなかった。星海自身もいくたびかこの試練にたえかね、くじけそうになる。時に迷い、時にやり場のない気持ちに落ちこむ。しかし、やはり彼にとっては音楽が心の安らぎであり、支えであった。どんなにつらい時でも、音楽が彼の心をなごませてくれた。こんな時、彼に大きな励ましを与えてくれたのは、フランス人教師の暖い心くばりであった。音楽会で名曲が演奏される時には、いつもきまって切符を送ってくれた。オベルドフェルはある有名な音楽会でバイオリンを独奏した時、彼を前の方の席に坐らせてくれた。このような望外な心くばりに、彼は感謝し、新たな勇気をふるい起こす。いつしか彼は、われながら自分の進歩を感じるようになり、複雑なテクニクもこなせるようになっていった。作曲の方もどんどんと作品を書けるようになって、彼に自信を与えてくれた。

異国での生活が苦しければ苦しいほど、また祖国へのなつかしさはひとしおつもの。しかし祖国からのニュースは暗いものばかりであった。彼は「国際工会」に参加していた。「国際工会」は当時の中国の写真を展示したり、ニュー

ス映画を上映した。ここでも彼が目にしたものは祖国の大洪水であり、飢餓にさまよう難民と化した同胞の姿であり、また国民党の大虐殺……等々であった。

彼はパリに来て、パリ祭のにぎわいを愛し、いつも人ごみの中からデモを見物しては、三色旗の国旗をふり熱狂的に国歌を歌う民衆に、ものすごい感動を覚えるのだった。しかし東北が日本帝国主義によって失陥したからだろうが、1932年のパリ祭は、いつもの時とちがっていた。

「それらのお祭りの日になると、私はいつものようにデモ見物に出かけました。しかし、今度は彼等の祖国を愛する群衆の熱狂ぶりやフランス国歌の悲壮なひびきが、ものすごく私を打ちのめしました。私は自分の多難な祖国に想いをよせ、三年来パリでなめ尽くしたいろいろな辛酸、無援、孤独、悲痛、哀愁、抑鬱の感情とまじりあって、両眼から涙があふれ、店に帰ってこっそり泣きました。悲しみの中に、私はいかにして祖国の危機を救うべきかという想いをつのらせていました。」⁽³⁰⁾

彼は生活の苦しさ、祖国への想いを音楽で書き綴った。フランスにやって来た当座の星海は、一つの創作に一年は費さねばならないという芸術家のいわゆる「慎重さ」をもって「ソナタ」のようなものに8カ月もの時間をかけていたのだが、苦痛にあえぐ人生、圧迫にあえぐ祖国を描写するようになると、彼はもう「これが高尚であるか否か、そんなことにかまっていられない」⁽³¹⁾ようになっていた。

たとえば「風」を作曲した時のようすを星海は次のように綴っている。

「私が自分でも比較的成功したと思っている作品“風”を書いた時は、ちょうど生活が逼迫してどうにもならなくなっている時で、私は7階屋上のポロ小屋に住まっていたが、この建物のドアの窓はすっかり破れておりました。パリの天候はもともと中国の南方よりも寒く、その年の冬の夜はまた大風が吹き、私はふとんを持ってなかったので、眠るに眠れず、あかりをつけて写作をせざるを得ませんでした。なんと風は容赦なく吹きこみ、石油ランプ（私には電灯をひくことなど思いもよりませんでした）は何度も何度も吹き消

されました。私は全くやるせない気持になって、壁をゆるがし、ドアの窓を吹きぬけ、烈しく吹きすさぶ寒風の音におののいていましたが、私の心はしだいに烈しくゆれ動きました。あらゆる人生の、祖国の苦辣、辛酸、不幸がことごとく湧き起こってきました。私は自分自身ではなく風を借りて懐いを述べ、この作品を書き上げました。以後、私はまた祖国への思いを『遊子吟』、『中国古詩』その他の作品に書き上げました。⁽³²⁾」

「風」は彼にとっても意外なほど好評で、彼の先生たちから大変おほめにあずかったばかりでなく、有名な音楽家からも激賞された。しかもパリで放送され、電波にのったし、また公開演奏されたりした。「風」の成功によって、「パリ音楽院」の大作作曲家ポール・デュカ (Paul Dukas) の知遇を得ることになった。デュカは印象派で、世界三大音楽家のひとりに数えられ、その門下生として許されたことは、星海にとっては破格の光栄であった。デュカはこの貧しい中国の音楽家の才能を愛し、衣服を送ってくれたり、お金をくれたり、その上他の門下生をよこして楽譜やたばこまでとどけてくれるといった実に細い気遣いを見せて、星海を援助し激励してくれた。そして「パリ音楽院」の高級作曲科を受けるようにと指示してくれたのである。デュカの援助によって星海のパリ生活はようやくゆとりをもち、音楽に専念できることになったのである。

音楽に専念できるようになったのは、実はもう一つの大きな理由がある。それは、これより少し前、若いフランス人女性の作曲家から援助を得たことである。

「彼女は私の作品を演奏してくれたことがあり、私にくじけてはならぬと励ましてくれました。彼女は私に歌やフランス語を教えてくれたばかりでなく、経済的にも時ならず私の面倒をみてくれました。彼女の母親も私にとってもよくしてくれました。パリ音楽院を受ける時も、彼女は八カ月間もピアノを練習して、私のために伴奏してくれました。⁽³³⁾」

星海は、この若い女性作曲家のことをさりげなく書いているが、星海の恋人と見てよいのではないか。彼の作品を演奏したことがきっかけで、彼の才能と努力に感じた彼女が、彼に歌を教え、フランス語を教え、かつ時ならず経済的

な援助をし、8カ月もの間ピアノを伴奏して彼のためにパリ音楽院への入学に備えてくれた。恐らくは生活の諸般にわたって、なにくれとなく星海の面倒を見てくれることもあったろう。この時彼女は、星海を結婚の対象として意識し、星海の身辺にいることを幸福に思うようになっていたのではなからうか。星海の方も彼女のやさしい心づくしに感激し、彼女への愛情を強めていたにちがいない。こんなほほえましいふたりを見て、彼女の母親も、娘の夫になるかも知れぬ星海にとてもよくしてくれたのであろう。私はこの若い女性作曲家をこう見る。でなければ、後述するように、星海は帰国に当って、この婦人に何も苦しいウソをつく必要はなかったのである。

さてパリ音楽院高級作曲科に受験の日、星海は守衛にさえぎられて校門をくぐるができない。「私の着ている物——袖たけが数センチも長い洋服では似つかわしくなく、その上『中国人』であったからです。私は守衛に高級作曲科の受験に来た旨を告げましたが、彼は信用してくれませんでした。」⁽³⁴⁾

この学校の校門をくぐる者はみな身だしなみがよく、これまで高級科には中国人としてはただひとり馬思聰がバイオリン科に在籍したことがあるだけだった。「途方にくれている時、うまいぐあいにポール・デュカ先生が外からやって来たのです。彼は私の肩をだいていっしょに入ってくれました。」⁽³⁵⁾ 恩師の出現によってようやく試験を受けることができたが、なおも「中国人」であるが故にいわれなき屈辱を味わねばならなかった。

星海は首尾よく高級作曲科に合格し、栄誉獎を受けた。奨品に何がほしいかと尋ねられた時、彼は食券がほしいと答え、望みどおり食券をもらっている。恐らく栄誉獎に食券とは、パリ音楽院としては星海をもって空前絶後とするのではなからうか。その後学校は、彼に校内で食事をすることも許してくれた。このように学校の配慮もあり、デュカの援助もあって、生活の心配はなくなり、心おきなく音楽に専念できるようになった。

入学後はもっぱら作曲を学び、兼ねて指揮を学び、また「国民学派」スコラカントールムにて音楽理論を学んだ。

生活の心配はなくなったが、学習上物質的な要求を満たすには、まだほど遠

かった。例えば必要な本を買うことも容易でなかった。そこで何度も中国政府に奨学金の請求をした。「私の成績や資格から言って、公費を受ける資格は十分」あると確信していた星海は、くりかえし執拗に手続きをとった。しかし祖国の政府からはなしのつぶてだった。学校の証明を出してもらっても、当時のパリ市長の証明までつけてもだめであった。ある時、中国政府の要人がパリに來た。この時彼が通訳をしたのだが、資金援助を懇願しても、やはり願いはききとどけられなかった。（この時彼はドイツに行って軍樂を学びたい旨申し出ていた。）結局彼は政府の援助を一文も受けることはできなかった。彼がパリ音楽院を終了できたのは、恩師と学校と、それに「若い女性作曲家」の援助のおかげであった。

1935年春、彼は作曲科を卒業した。この時すでに恩師デュカは亡く、これを機に帰国を思いたつ⁽³⁶⁾。もとよりこれ以上フランスに留って研究を続けられる方策が立たなかったからであるが、やはり租国に残した母のこともあり、帰国を急ぐ気持ちがつのったのであろう。ところが上述のあの若い女性作曲家が、しきりにパリに留まるよう勧めるのであった。これは純粹に星海の音楽探究のためを思っただけのことであったかもしれないが、さきにも述べたように、むしろ星海に寄せる彼女の愛情から発したところが大きかった、と私は考えたい。だから星海は、手のこんだ偽装工作をしくまねばならなかったのである。「私はこれ以上留まるわけにもいかず、といって彼女の厚意も無にできず、彼女には半年後パリにもどってくるとウソをついたのです。私はたくさんの曲稿を彼女のところに残し、またたくさんの書物や原稿などを下宿に置いたままにしておきました。というのは部屋代を払うお金がなく、取りにもどることもできなかったからです、恐らく今でもそこに置いてあることでしょう。」⁽³⁷⁾

ここで部屋代を払うお金がなかったというのは、むしろ為にする言い方ではなからうか。星海は、このころになると生活も比較的安定していて、時にヨーロッパの各地を旅行し、見聞を広める余裕もできていた。しかも帰国の直前、最後のヨーロッパ旅行としてロンドンを訪れている。ロンドンに遊ぶだけのお金があったら、誠実な星海のことであるから下宿に義理を欠くようなはずはな

い。これはやはり、彼女のもとを去るための苦しい偽装だったのではないか。

Ⅶ 帰 国 (1935年夏)

1935年の初夏、帰国に先だってロンドンを訪れた星海は船からおりると、職さがしの流浪者とまちがえられ、官憲に拘留されて不愉快な思いをする。彼がいくら説明しても信用されず、やっと公使館と連絡がついて釈放されるのだが、ここでもまた弱小民族の悲哀を新たにするのであった。

ロンドンから帰った彼は、すぐ帰国の途についた。お金が十分あるわけではないので貨物船の客となった。それも友人の奔走のおかげであった。

帰国する労働者や船員と乗りあわせたこの船中での生活は、彼にとってこよなく愉快なものであったようだ。それは、母の待つつかしい祖国への旅路だったから、おのずと心もおどったのかもしれないが、労働者とこんなにうまが合ったのは、彼自身が苦労をなめ尽くした「労働者」だったからであり、そのうえ異国で弱小民族の悲哀をかみしめあった間柄が、共通の基盤をつくっていたのである。ここには何のかくしだてもない、ざっくばらんなつきあいしかなかった。豪華客船で満喫するであろう贅沢な雰囲気は、味わおうにも味わえなかったが、星海としては、くったくのない船旅だった。貨物船はアフリカをまわり、各地に寄港した。寄港するさきざきで上陸し、見物して歩くことも楽しかった。この見物は、同時にいろいろな植民地の実態をかいま見ることにもなった。「中国人」ばかりでなく、世界にはもっと悲惨な目に遭っている民族のあることを、自分の目で確かめ、深い同情を禁じ得ない。帰国の船中で、彼は前にもまして祖国の将来を案ずる愛国主義者になっていた。

貨物船は香港についた。星海はここで下船し、長い航海をともした人たちと別れた。香港は、かつて星海が広州の嶺南に学んでいたころ、生活の資を得るために働きに来た思い出の土地である。七年ぶりに見る香港は、昔ながらのたたずまいを見せていた。帰国したのだという実感が喜びとなって湧き起こった。と同時に、建物といい雰囲気といい濃厚な殖民地色に、えも言えぬ怒りがこみあげる。「ヨーロッパに行かないところはこんな恥辱は知りませんでした」⁽³⁸⁾

というように、曾てなじんだ香港の町なみに対してさえ、あらためて民族の恥辱を感じる変わりようであった。インド人巡査にまでいばり散らされて、憤怒の唇をかみしめ、酷使にあえぐ波止場労働者のボロ着姿に、心をえぐられる。

星海は、香港から広州に足をのばした。広州には、青春時代を過ごした母校嶺南大学がある。ここで彼は旧知の師友と旧交をあたためるひとときもあったろう。その時、彼はパリで「援助を得た」先輩馬思聰を訪れている。馬思聰はその時の模様を次のように記している。

「1934年か1935年の夏、広州でのむし暑いある日、突然星海が私の目の前に現われた。彼はふ厚い冬着の洋服を着ていた。彼はフランスから帰ったばかりで温帯の夏着をもっていなかった。彼は二冊の大きなノートをかかえていた。一つは彼がこれまでしたためてきたメモで、もう一つは彼が作曲した楽譜であった。⁽³⁹⁾」

星海は、その後のパリ生活を語り、成功した作品を語り、パリ音楽院での成果を語り、得意然として楽譜のノートを見せたにちがいない。しかし楽譜ののぞき見た馬思聰には、一見して星海の作品の稚拙さが先に目についてしまうのだ。

「ここにはピアノやバイオリンの奏鳴曲が書かれていた。『風』もあれば、独唱曲もあり、弦楽四重奏もあった。私は **Cesat Franck** の影響をすごく受けていると思った。彼のピアノ曲はとてもへたで、ピアノの効果が生かされていなかった。ピアノの技巧がわかっていないのだ。しかしそれには気魄があり、粗野な力があり、誠実味のあるまごころがあった。彼は話がすむと、大急ぎで船にもどり、上海に行ってしまった。これが彼に会った最後であった。⁽⁴⁰⁾」

さすがに馬思聰ともなると、てきびしい。パリで認められた星海の作品に対しても、技術的にはかくも痛烈に酷評する。星海と馬思聰の関係をみてみると、両者は音楽を介して、情を交えぬ冷徹なつながりがあっただけで、それ以外には心あたまるような交遊関係は殆どなかったようである。両者の関係をふりかえると、パリで師のオベルドフェルを紹介して以来馬思聰は、貧苦の星海に対して特に「援助」の手をさしのべることもなかったようである。この広

州での再会后、また両者の往来は切れてしまう。

これまで星海について紹介される場合、きまって「馬思聰の援助を得て」フランスに留学した旨記される。おしなべて星海の紹介は簡略なものしか行なわれていなかったのだから、それだけに、えてしてこの「援助」云々のくだりがかなり重く受けとめられてしまいがちである。かく言う私も、両者の間にもっと密接な関係があったように思いこまされていたのだが、上述の如き関係を知って意外の感をまぬがれなかった。

星海の乗った貨物船に、途中南洋から乗りあわせただけの青年がいた。彼もまた香港で下船したのだが、乗りかえた上海行きの船で、再び同艙の客となり、星海と顔を合わせた。この青年は俯拾といい、詩をよくした。のちに俯拾は、救亡歌曲運動の中で星海とともに活動し、彼の歌曲に作詞することになるのだが、上海までの4日間船上で、ふたりはすっかり意気投合し、百年の知己の如くになっていった。俯拾は、星海の経歴に敬服し、作品に感動した。ふたりの話題は、祖国の解放や、祖国の新音楽運動にも及んだ。その時星海は、しきりに聶耳をたたえたいらしい。俯拾は「对于聶耳的天才的称赞，更引起我的欣敬⁽⁴¹⁾」と記しているように、星海が聶耳の天才に対して賛辞を惜しまなかったことから、ますます星海が好きになってしまうのだった。

この時、星海と俯拾は、聶耳の死を知っていたのだろうか。聶耳は1935年7月17日、日本の鶴沼の海に23才の生涯を閉じているのだが、星海がパリをたったのは初夏だから、星海・俯拾の邂逅は、早くも同年の8月と推定される。

若柁は「1935年8、9月の間、俯拾が南国から上海にもどってくると、彼はとっても嬉しそうに私に話してくれた。船の上で、馬思聰と並び称せられる南国の名演奏家で、フランスから帰ったばかりの音楽家と仲よくなったというのだ。——それが洗星海⁽⁴²⁾だった」と記している。これから見ると船上の邂逅は、聶耳の死から1、2カ月経過しているらしいが、外国帰りの星海や上海を離れていた俯拾には、その訃報はとどいていなかったことも十分考えられる。よしんばその訃を聞いたにしても、星海はついに生前の聶耳と一面識も得ていなかったし、異国にあっては聶耳の音楽活動について知るところも聞くところも少

なかったはずである。にもかかわらず冼星海は、聶耳の革命音楽にかくも深い理解を示したのである。中国は、革命音楽の旗手聶耳を不幸にして失ったが、聶耳がきり開いた道を突進する新しい旗手を、この時迎え入れようとしていたのである。

さて上海では、なつかしい母との再会が待っていた。

「私は上海北四川路のある中二階の小部屋で、一別以来7年ぶりに母に会いました。彼女は前よりずっとふけていました。7年来、自分で自分のくいぶちを求め、私には私の理想を追わせてくれました。自己を犠牲にしたこのような彼女の母性には、われながらなんともやりきれない気持ちを起こさせるのでした。私はその時つくづくと思いました。私はもっとよく母のめんどうを見なければいけない。もうこれ以上母に苦勞をかけてはいけ⁽⁴³⁾ない。」

この母子再会の場面を、俯拾が見ている。「上海につくと、僕は彼を老靶子路の寓所に送った。彼の母親は数日前女中づとめをやめ、この中二階のおんぼろ部屋で彼を待っていたのだ。彼らは顔を合わせるや、声をあげて泣⁽⁴⁴⁾いた。」

すっかりふけこんでしまったこの母は、この時63才であった。若くして寡婦となり、働きづめに働き、ひとり息子を育てあげ、息子の望みとあらば、彼女のすべてを犠牲にして孤独に耐えてきた。「私はもっとよく母のめんどうを見なければいけない。もうこれ以上母に苦勞をかけてはいけ⁽⁴⁴⁾ない」と心に誓う星海だが、フランス帰りの音楽家に待ちうけていたのは、失業であった。働き口はすぐにはみつからず、逆に老母のすねをかじって暮らさねばならなかった。なんとか母を養えるようになったのは、何人かの学生を募り、バイオリンを教えるようになってからのことである。

母子水入らずの生活が始まった。すでに上海は、救亡歌曲運動の中心地であった。ほどなく冼星海は、この運動の中に吸い込まれていく。

注

- (1) 拙稿、『明治大学教養論集』通巻77号人文科学（1973年）所収。
- (2) ㊸ 日本で冼星海の音楽と略歴を紹介したものには以下の如きものがある。
- ① 中国音楽研究会編『新中国の音楽』飯塚書店、1956年。
 - ② 村松一弥「冼星海」『アジア歴史事典』平凡社（1960年）所収。
 - ③ 村松一弥『中国の音楽』勁草書店、1965年。
- ㊹ 中国での冼星海に関するものとしては、筆者の知り得たものとしては以下の如きものがある。
- ① 毛子良編『人民歌手冼星海』生活・読書・新知三聯書店、1949年。なお同書には、紫梁の「偉大的愛國主義者の音楽家」（代序）のほか、以下の諸篇が収められている。
- I 冼星海先生的重要作品（文字著述）；①「我學習音樂的經過」（1940年3月21日）②「民歌与中国新興音樂」③「近代中国音樂發展的幾個時期」④「我怎樣写“黄河”」⑤「“九一八大合唱”序」⑥「“反攻”歌曲集自序」（1940年春）⑦「序“抗戰歌曲”第二集」⑧「序“大家唱”第二集」
 - II 冼星海先生的重要作品（歌曲創作）；①救國進行曲（齊唱）②頂硬上（二部合唱）③搬夫曲（二部合唱）④夜半歌声（独唱）⑤拉犁歌（齊唱）⑥救國軍歌（四部合唱）⑦青年進行曲（二部合唱）⑧在太行山上（三部合唱）⑨新時代的歌手（二部合唱）⑩反攻（二部合唱）⑪梁紅玉（齊唱）⑫黄河大合唱（八段大合唱）⑬新年大合唱（七段大合唱）⑭生産大合唱（二幕活報型歌劇）
 - III 年譜及創作総目；①年譜紀略 ②創作総目（初編）
 - IV 冼星海先生的創作路線与工作作風；①趙滄「星海的創作道路」②李綠永「星海的創作道路」③俯拾「冼星海及其創作路線」④向隅「學習星海同志的優良作風」⑤馬可「冼星海同志的工作方法与作風」⑥「關於生産大合唱」（座談記錄）
 - V 回憶録；①郭沫若「弔星海」②馬思聰「憶冼星海」③何其芳「記冼星海同志」④孫慎「憶冼星海」⑤若柵「憶冼星海同志」
- ② 人民音楽社編「冼星海創作札記」、『人民音楽』1955年8期，9期，10期所収。
 - ③ 馬可「冼星海是我国傑出的社会主义現實主義音樂家」、『人民音楽』1955年11，12期，1956年1期所収。
 - ④ 李凌「發揚聶耳・冼星海的戰鬥傳統」，同上。
 - ⑤ 〔蘇聯〕穆拉傑里（陳綿訳）「回憶中国作曲家冼星海」，同上。
 - ⑥ 謝功成「談“黃水謠”的音樂处理」，同上。
 - ⑦ 人民音楽社記者「首都人民隆重紀念聶耳・冼星海」，同上。
 - ⑧ 同上「蘇聯人民紀念聶耳・冼星海」，同上。
 - ⑨ 郭乃安「すぐれた人民の音楽家——聶耳と冼星海」、『人民中国』1955年12月号所収。

- ⑩ 孫慎「人民的音樂家——聶耳・冼星海」，《人民畫報》1955年12期所收。
- ⑪ 張銳「冼星海在蒙古的朋友」，《人民音樂》1956年2期所收。
- ⑫ 曾理中「對“黃河大合唱”中作曲技術運用的一些体会」，《人民音樂》1957年2期所收。
- ⑬ 郭乃安「“在太行山上”曲調寫作上的一些特点」，同上。
- ⑭ 汪立三・劉施任・蔣祖馨「論對星海同志一些交響樂作品的評估問題」，《人民音樂》1957年4期所收。
- ⑮ 劉良模「回憶救亡歌詠運動」，《人民音樂》1957年7期，8期所收。
- ⑯ 王雲階「駁“論星海同志一些交響樂作品的評估問題”」，《人民音樂》1957年8，9期所收。
- ⑰ 周茂「從一本筆記本想起的」，《人民音樂》1958年2期所收。
- ⑱ 瞿維「憶星海」，《人民音樂》1958年8期所收。
- ⑲ 「人民音樂」編集部「更好地發揚聶耳・冼星海革命音樂的戰鬥傳統」，《人民音樂》1960年10期所收。
- ⑳ 夏衍「永生在人民的心裏——在首都聶耳・冼星海紀念音樂會上的講話」，《人民音樂》1960年11，12期所收。
- ㉑ 呂驥「無產階級革命音樂的先鋒——在首都聶耳・冼星海紀念音樂會上的報告」，同上。
- ㉒ 李凌「聶耳・星海作品演出述評」，同上。
- ㉓ 張洪島「更多更好地演奏聶耳・星海的作品」，同上。
- ㉔ 王之光「聽業餘團體紀念聶耳・星海的音樂會」，同上。
- ㉕ 單也「海燕永生——記聶耳逝世25周年，冼星海逝世15周年紀念音樂會」，同上。
- ㉖ 李任民「學習星海同志的群眾歌曲創作」，《人民音樂》，同上。
- ㉗ 鶴童「星海同志在延安」，同上。
- ㉘ 李群「你們要堅持，要鬭爭」，同上。
- ㉙ 汪鵬「星海的思想，作風和創作風格」，同上。
- ㉚ 孫幼蘭「冼星海在“嶺南大學”及其他」，《人民音樂》1963年1期所收。
- (3) 郭乃安「すぐれた人民の音楽家——聶耳と冼星海」(『人民中国』1955年12月号)。
村松一弥『中国の音楽』
- (4) 毛子良編「年譜紀略」(『人民歌手冼星海』)
- (5) 孫慎「人民的音樂家——聶耳・冼星海」(『人民畫報』1955年12期)
- (6) 孫幼蘭「冼星海在“嶺南大學”及其他」(『人民音樂』1963年1期)
- (7) 若柘「憶冼星海同志」(『人民歌手冼星海』)
- (8) 孫幼蘭「冼星海在“嶺南大學”及其他」
- (9) 同上
- (10) 毛子良編「年譜紀略」
- (11) 孫幼蘭「冼星海“嶺南大學”及其他」
- (12) 托諾を中国音になおしてトノーの如くしたが、洪滄の「聶耳年譜初稿」による

- と、聶耳は1932年9月バイオリンを個人教授托諾夫（トーノフ）に師事したとある。同一人物ではなかろうか。
- (13) 孫幼蘭「洗星海在“嶺南大学”及其他」。ただし毛子良の「年譜紀略」によれば北京大学図書館助理員とある。
 - (14) 孫幼蘭「洗星海在“嶺南大学”及其他」。なお「当時の資料」は、ここでは明らかにされていないが、嶺南大学内の学生組織の会報の類いではないかと推察される。
 - (15) 孫幼蘭「洗星海在“嶺南大学”及其他」
 - (16) 若柵「憶洗星海同志」
 - (17) 毛子良編「年譜紀略」
 - (18) 若柵「憶洗星海同志」
 - (19) 洗星海「我學習音樂的經過」（毛子良編『人民歌手洗星海』）
 - (20) 馬恩聡「憶洗星海」（同上）
 - (21)~(26) 同上
 - (27) 洗星海「我學習音樂的經過」
 - (28)~(30) 同上
 - (31) 「洗星海創作札記」（『人民音樂』1955年8期）
 - (32) 洗星海「我學習音樂的經過」
 - (33)~(35) 同上
 - (36) 平凡社の『音樂事典』によれば、Paul Dukas の生卒は、1865.10.1—1935.5.17となっている。卒業の時期は晩春もしくは初夏であろう。
 - (37) 洗星海「我學習音樂的經過」
 - (38) 同上
 - (39) 馬恩聡「憶洗星海」
 - (40) 同上
 - (41) 俯拾「洗星海及其創作路線」
 - (42) 若柵「憶洗星海同志」
 - (43) 洗星海「我學習音樂的經過」
 - (44) 俯拾「洗星海及其創作路線」